Library and Information Science No. 15 1977

アメリカ公共図書館における教育的サービスの発達

The Development of Educational Services in American Public Libraries : An Overview

常　盤　　繁
Shigeru Tokiwa

Résumé

For about a decade, there have been heated discussions on "lifelong education" in Japan, and the role of public libraries has also been taken up in this context. It seems to the writer of the present paper rather timely to think about the potentiality of public libraries to meet this educational needs. This paper discusses such potentiality and limitations by tracing experiences of American public libraries.

Looking back to the history of American public libraries, we find that the idea of "continuing or lifelong education for adults" was often used in a statement when public libraries were in the making in the United States. For example, we can definitely recognize that the concept of continuing education was already expressed in the 1852 Commitee Report of the Boston Public Library. While early public libraries did no more than collecting and providing important books for those who wished to educate themselves, later established ones had developed many services to encourage and stimulate them. Among these educational services, the most outstanding were readers' advisory service, services for the educational programs of other organization and groups, and library-sponsored group programs which were developed as library adult education after 1920. They were integrated into adult services in 1950s, as many other educational services to promote and stimulate reading.

This paper reviews the development of these services along with some philosophies that support them, and refers briefly to the difference between education and service which led to the problem of the meaning of informal self-education. Libraries should have more extensive knowledge about the process of informal education and the role of librarians included in it, if public libraries are to be more useful institutions for implementing the philosophy of lifelong education.

常盤　繁：東京大学教育学部助手
Shigeru Tokiwa, Teaching Assistant, Faculty of Education, University of Tokyo.

アメリカ公共図書館における教育的サービスの発達

I. 教育的サービスの概念について
II. 教育的機能の起源，1850-1920
III. 教育的サービスの発達
IV. 〝教育〟と〝サービス〟
V. む す び

I. 教育的サービスの概念について

今日，公共図書館の機能として認められているもののうちに教育的機能がある。これは公共図書館史の上ではもっとも古く，また重要視された機能の一つであるが，近年，生涯教育という考え方が提唱されて，この機能が再び注目されつつあるように思われる。[1)]

本稿は，このような動きの中で公共図書館がどのような方法によって，その教育的機能を果たしていくべきかを考察する準備として，アメリカの公共図書館で発達した教育的サービスの歴史を概観することを目的とした。

19世紀中葉に誕生した初期のアメリカ公共図書館は，R. E. Lee によれば，教育的役割を第一の目的とし，娯楽的読書および情報レファレンスという他の機能はその後に，それぞれ1870年代，1880年代以降に発達した。[2)] しかしながら，このように教育に重点がおかれていたといっても，初期の公共図書館は図書の収集，保管，提供を本来の責務として，利用者の教育活動には何ら組織的な援助をしなかった。公共図書館の教育的役割は教育手段の提供，すなわち教育活動に必要な図書を提供することによって果たされるものとされたのである。これに対して，教育活動を積極的かつ組織的に援助，促進する教育的サービスが発達したのは，1920年代以降，成人教育運動の影響を受けるようになってからである。[3)] 本稿も主として，この1920年代以降の活動をとりあげる。

ところで，このようにここでいう教育的サービスは成人教育と密接な関連をもち，〝図書館成人教育 (library adult education)〟と呼ばれるが，その概念は必ずしも明確ではない。Monroe によれば，図書館成人教育に対する考え方や取り組み方には，個々の図書館，図書館員，また時代によりかなりの相違がある。彼女は，全国的運動と共に，三つの公共図書館 (Kern County Free Library, Enoch Pratt Free Librery, New York Public Library's Circulation Department) の1920年から1955年に至る活動を詳細に分析して，図書館成人教育の概念は，大多数の図書館員にとって，時代の進むにつれて新しく登場してくる三つの主要なサービス，すなわち順に，読書指導サービス (readers' advisory service)，他の成人教育機関へのサービス，図書館が後援するグループ活動 (library-sponsored group program) を意味していたと述べている。そして，これらのサービスはそれぞれ，まず成人教育運動への図書館の参加を示す新しく特殊なサービスとして登場した。次にそのための技術の開発やその専任職員の訓練が行われ，最後には特殊なサービスとしてではなく，職員全体にその責務が分担吸収され，さらに別の新しいサービスが図書館成人教育としてとらえられ実施されるという過程を繰り返した。その結果，1955年までには，これらのサービスは〝成人サービス (adult services)〟という，より広い概念の中へ吸収されていくのである。このように大部分の図書館員にとって，図書館成人教育はある時期にある一つの特殊なサービス，つまり図書館全体が関わるのでなく，特定の専任の係が扱うサービスそれ自体を意味した。他方，図書館成人教育を推進した一部の少数の人々（館長やこのサービスの専任職員）は，それを〝サービスの質あるいは理念，つまり教育的目的を達成し社会的必要性を満たすための図書館資料の活用〟ととらえ，またそれは，すべての職員，業務が関与すべきものであって，個々のサービスは成人教育という目的のための手段にすぎないと考えていた。[4)] このように，図書館成人教育の概念は，成人教育への公共図書館の関わり方とその方法をめぐる考え方の違いから異なる意味内容をもっていたのである。

しかしながら，機能的にとらえれば，図書館成人教育の本質は読書（あるいは図書館資料の利用）の促進 (stimulation) と指導 (guidance) であり，〝計画された読書プログラムやプログラム立案の援助，および図書あるいはフィルムによる討論は，累積的な学習経験への関心を呼びおこし，またそれに向けて利用者を導くために開発されたより複雑な技術だった〟[5)] のである。従って，図書館成人教育が次第にそのような機能として理解されるようになると，その概念は成人を対象とする一般

的なサービス，すなわち〝成人サービス〟の大半を含むものとなり，〝図書館成人教育〟と〝成人サービス〟とはほとんど同義の概念として融合していくのである。それは，成人教育という概念がライブラリアンシップにとって外在的なものとして理解されていた状況から，ライブラリアンシップの1つの基本的な理念あるいは目的として定着したことを示す[6]ものであったが，同時に〝成人サービス〟という用語は〝成人教育を指向する図書館員にとっても，そうでないものにとっても，大変満足のいく用語となった〟[7]からであった。

他方，このような概念の広がりと用語の上での一種の妥協は，再び概念の混乱をもたらし，多様な成人サービスのうちで何がより教育的なサービスであるかという問題が生ずる。Leeは1850年から1964年の間に，大多数の公共図書館で提供された教育的サービスの数とタイプは次のように変化したと述べている。[8] (1) 資料の提供。(2)資料の提供と人的援助。(3)資料の提供，人的援助，利用促進。(4) 資料の提供，人的援助，利用促進，グループへのサービス。すなわち，最初，教育的内容をもった図書の提供それ自体が教育的であると考えられていたのに対し，次第に利用を援助，指導することがより教育的なサービスとしてつけ加えられてきたのである。成人サービスには(4)の全部が含まれるが，Bloomが指摘しているように図書の提供および人的援助と利用の促進，援助とでは，サービスの内容と質が異なり，区別して論ずる必要があろう。[9] 実際，〝どのようなサービスでも成人の発達に寄与するであろうが，図書館員が，図書館資料の選択と活用において，利用者と密接な指導的関係をもつことのできるサービスが，図書館成人教育の核であると考えられた〟[10]のである。

教育的サービスの発達とは結局，単なる図書の提供というサービスから，成人の学習意欲を呼びさまし，またその学習プロセスに関与して方向づけを与えるというサービスを公共図書館がより中心的な機能として受け入れていった歴史なのである。またこの点にこそ，公共図書館に対する成人教育運動の影響の本質があった。上に述べた概念の混乱も，公共図書館が利用の促進，援助，指導という教育的働きかけをその本質的機能としてもつかどうかについての考え方の相違，変遷から生じている。Monroeはその論点を次のように要約している。

(1) 図書館はその教育の責務を，出された要求を満たすことによって果たすべきか，あるいは個人および社会のニーズを理解し，そうしたニーズを予知することによって果たすべきか。
(2) 図書館はコミュニティおよび個人のニーズを満たす際，蔵書の選択とそれへの案内を唯一の役割とみるべきか，あるいは種々の技能，技術を開発して個人およびグループを援助し，彼らが図書館資料を利用して諸問題を満足のいくように解決し，ニーズを完全に満たせるようにすべきか。
(3) 図書館は資料の利用を促進する責務を果たす際，資料の中にある知識(ideas)の活用を促進し，どの知識が社会的に重要であるかを判断する機能をもつかどうか。[11]

以上，教育的サービスの歴史を考察する際の概念上の問題について検討したが，以下の章ではこうした点に注意しつつ，その歴史的展開を概観する。

II. 教育的機能の起源，1850-1920

前章で述べたように，本稿では1920年代以降の活動を中心に扱うが，公共図書館が主として教育のための施設であるという考え方は決して新しいものではなかった。Stoneは次のように述べている。〝'成人教育という用語は使われなかったにしても，その概念は，早くも1850年に公共図書館の主要な責務として宣言されたし，1876年にはMelvil Deweyによってはっきりと示唆された。〟[12]そこで，1920年代以前のそのような概念について，以下に簡単に触れておこう。

1854年に開館したボストン公共図書館は，その後の公共図書館運動の原型となり，最も影響を与えたとされているが，[13] この図書館の設立に重要な役割を果たしたEdward Everett および George Ticknor の書状や1852年の委員会報告書には，公共図書館が公立学校システムを補うものとして必要とされたことが明示されている。[14] すなわち，市民の知的向上とモラルの向上とをはかるためには学校教育だけでは不十分であり，その成果を持続させ増大させるための手段，つまり読書の機会を提供することが必要だったのである。

この場合，主要な教育手段は書物であり，ほとんどの成人は書物を買う余裕がなく，また，成人はだれでも自己教育を行う能力と意欲をもつ，ということが前提とされており，[15] 従って，草創期の図書館では書物の収集と保存に力がおかれて，利用者を援助することはその責務とされなかった。選書にあたっては，教育的機能が強く意識されて内容の高い書物が選ばれ低俗な小説類は厳格

に排除された。しかも,その利用は館内に限られたから,結局利用者は知的関心をもつ教育程度の高い少数の人々に限られざるを得なかったのである。ただし,当時はまだ初等教育しか普及していなかったことが注意されねばならない。

しかし,1870年代に入ると次第に,利用者層を広げようとする動きがでてくる。それに拍車をかけたのは1876年に設立されたALAであった。その歴代の会長には著名な公共図書館長があたり,彼らは教育を重視して図書館の利用面に注意を向けたのである。彼らの課題は,教育の場としての図書館の重要性が一般大衆および図書館員の間で決して十分に認識されていないこと,そして大衆は文化に対する関心を強くもっているわけでなく,その手段が与えられたからといって必ずしも自己教育を行うわけでないということであった。彼らは,公共図書館=〝大衆の大学〟というイメージを大衆に広くPRし,図書館員には教育者としての責務を自覚させる必要性を説いた。同時に,公共図書館の役割は,学校教育の単なる補助でなく,独自の意義をもつものと考えられるようになった。学校と図書館は教育という一つの目的のためのそれぞれ欠くべからざる別個の手段であり,相互に補完的なものと考えられたのである。そして,そのどちらが欠けても完全な教育はありえないとされた。

図書館員による人的援助(personal assistance)の必要性が説かれるようになったのも,こうした理念を背景としていた。計画的な人的援助の必要性を最初に主張したのは,1876年,Samuel S. Greenであったが,Rothstein[16]によれば,彼がそれを必要と考えたのは,〝大衆的図書館をよく利用する人々は,一般に,必要とする書物を選ぶことができるだけの知識をもっていない〟ということであり,その主たる目的は,〝人々の小説ばかり読む趣味を向上させる手段としての人的援助の有効性〟にあった。彼の提唱は,1880年代以降広く受け入れられ,いわゆるレファレンス・サービスも加えられて,次第に図書館業務の中で中心的な位置を占めていくようになるのである。[17]

小説読書もまた,そのような意図から正当化されるようになった。まず読書に関心をもたなければ教育はありえないのであり,小説読書は,図書館の本来の目的(教育)への踏み台である。教育は利用者の知的水準に応じた内容から始め,図書館員の人的援助によって徐々に向上させられるのであると考えられた。しかし,このような楽観的な正当化は後々まで図書館の目的に混乱を生じさせることになったのである。

この時期にはまた整理技術が発達し,本の貸出,開架制,日曜開館,開館時間の延長などの措置もとられるようになり,こうして公共図書館は19世紀末までに利用サービスを中心とした体制に変わっていくのである。

20世紀に入ると,利用サービスの範囲はますます拡大される。配本所や分館の設置,移動図書館の導入,カウンティ図書館の発達,児童サービス,小説類の増加,レファレンス・サービスの拡大,カーネギーによる図書館数の増加,広汎な広報活動,これらは公共図書館の量的質的な充実をもたらし,また,利用者も増加した。他方20世紀初頭のリクリエーション運動の影響で健全な娯楽が正当化されて,小説読書が内容の高い読書に導くかどうかは問題にされなくなった。その結果,利用者の当然多い娯楽的機能が教育的機能より重視されるようになり,同時に業務の評価は利用者数によって測られるようになった。

教育的サービスは,中等教育の発達と共に主として,ハイ・スクールに進学あるいは卒業できなかったものの継続教育と1900〜15年に渡米した移民に対するアメリカ化に向けられていたが,まだ大都市の図書館以外,あまり活発ではなかった。[18] むしろ,教育的機能の限界が論じられるようになった。継続して自己教育を行う成人は極めて少数であるため,理念と現実の間には大きな隔りが生じた。つまり,理念の上では,公共図書館は第一に教育機関であったが,現実には娯楽機関にすぎなくなっていたのである。それは,利用者を増加させる以外,明確な目的をもたずにサービスを拡大させた結果でもあった。利用者数の増大とサービスの拡大は,公共図書館運動を推進した人々の抱いた教育理念を実現するものとはならなかったのである。しかし,次の時代からは,こうした状況を克服しようとする強い欲求と努力がみられる。それは,教育を第一の目的にしようとする努力であり,同時に,資料の提供という枠を越えて教育そのものに直接関与する技術の開発の試みであった。

III. 教育的サービスの発達

1920年までの教育的サービスは実際には,学校教育のドロップ・アウトに対する継続教育機会の提供(すなわち,学校教育の補完)という性格が強く,その教育も人的援助はあったものの,他からの助けを借りずに自分自身の責任で行うものとされた。しかし,1920年代以後,国民の教育レベルは急速に向上し,そうしたドロップ・

アウトへの機会提供という目的から，すべての成人が余暇を創造的に活用し，知識を獲得する機会を提供するという目的に重点が移行していく。そして，成人教育運動の活発化に伴い，学校教育の補完という考え方を脱して成人教育活動に参加・協力するという傾向が強まり，その一環として自己教育のプロセスに次第に関与していくようになるのである。[20] そのきっかけを作ったのは，第一次世界大戦中，カーネギー財団の資金援助で ALA が企画した The Library War Service Program であった。これは，各地の駐屯部隊に図書館サービスを提供する計画で，これに参加した 700 人以上の図書館員は兵隊に個人的な読書指導を行い，これが大きな成果を収めた。[21] これらの図書館員達の中には，次第に図書館サービスの量的評価に疑問を抱き，直接的，個人的に読書のプロセスに関与して，サービスの質を向上させようと考えるものが出てきた。[22]

この成功を戦後の一般社会に適用しようと計画されたのが，1920年の ALA Enlarged Program であったが，反論が大きく実行には移されなかった。しかし，少数の図書館員の間には図書館のもつ教育的可能性に対する関心が高まっており，この計画の 1 つの成果として1922年から24年の間に，5 つの大都市[23]の公共図書館が読書指導サービス (readers' advisory service) を開始した。このサービスは面接と読書リストによって行われるもので，面接によって担当者は利用者の教育レベル，関心，読書レベルなどについて知り，それに基いて学習のテーマを提示し，同時にそのための読書リストを作成提供するというものであった。このサービスは1940年頃まで，図書館成人教育の最も重要なサービスとしてとりあげられた。これによって，読書に目的と体系が与えられ，図書館員は教育的プロセスに関与することが可能となったのである。それと共に，成人教育を推進する側から，このような動きに強い反応が示され，成人教育における図書館の役割をさらに拡大させようとする働きかけが行われる。

まず，Enlarged Program に関心をもったカーネギー財団は成人教育における公共図書館の可能性を検討し始めた。そして財団の職員 W. S. Learned が，1921年から23年にかけて行った公共図書館に関する研究は，教育施設としての図書館の可能性を初めて包括的に打ち出したものであった。彼は，読書指導をはじめとする当時実際にいくつかの図書館で実施されていた教育的・情報的サービスを検討し，知識の普及という広い観点からそれらのサービスを一層拡大させることによって，公共図書館を community intelligence center とすることを構想したのである。そこでは，図書館は極めて大きな責務を与えられている。〝あらゆる所で進歩的な図書館員は，今日比類のない速度で蓄積されつつある大量の情報を利用しやすい形に整理・圧縮するような措置がとられねばならないこと，そして我々が現に所持している資源が有効であるためには，これまで以上に幅の広い，かつ信頼のおける知識が，とりわけ成人のために，比較的迅速に，かつ優れた判断によって獲得できるような手段が見出されなければならないことを認識している。〟[24] つまり，図書館員は知識の媒体のみを扱うのでなく，知識そのものと個々の利用者の必要性とが的確かつ効率よく結びつけられるように知識を選択，処理すべきでありまたそうした関係がより広汎に普及するよう努めるべきなのである。従って，図書館員は知識と利用者，双方について深い理解と判断力をもたなければならない。そして彼は，印刷物のみならず，講演や展覧会，展示，講習会，映画，学習クラス，クラブなどこれまでに発達してきた，知識の普及に役立つあらゆる方法を活用し，図書館員の教育的役割を発揮させることによって，公共図書館が〝体系的かつ説得力を有する形で，知性を成人の関わるあらゆることがらに集中させる，真の community university をもたらすであろう〟[25] と考えたのである。しかしながら，このように壮大な彼の構想は，当時の図書館員には非現実的と思われ，あまり受け入れられなかった。彼らはそうした総合的なものより，読書指導に図書館成人教育の可能性をみていたのである。[26]

カーネギー財団はさらに，1924年，国内の成人教育活動の実態調査に乗り出した。その結果，5 種類の調査が行われたがその 1 つとして図書館の側では，ALA に Commission on the Library and Adult Education が設けられた。2 年間の調査の後，同委員会は報告書を提出し，成人教育への図書館の寄与として次の 3 つの活動をあげた。(1) 組織されたグループやクラスの外で 1 人で学習する者に，指導・助言サービスを提供する（特別な訓練を受けた職員が，図書の選択を助け，個人の年齢，教育，好み，過去の経験に合った読書コースを用意する），(2) 地域で得られる成人教育活動に関する情報提供，(3) 成人教育活動を行う他の諸機関への資料提供。さらに，多くの成人が書物を単なる学校教材としか考えず，学校卒業後は，生活上の問題解決や，娯楽や文化活動の源泉として書物を使わないような現状を解決するため教

育者と図書館員の協力が必要であること，一般成人に読みやすい本（readable book）が乏しく，この改善のために教育者，出版者，著者の間で協力が必要であることなどを勧告した。[27]

この報告書は Learned の提唱と異なり，図書館の役割の重点を読書の促進におき，それまでの大半の図書館の活動とつながりをもっていたことと，内容が具体的であったことから，図書館員に強い影響を与えた。[28]

これを受けて ALA は1925年，カーネギー財団の援助で，*Reading With a Purpose* という，読書指導サービスの拡大をめざした読書コースをパンフレットの形で出版しはじめた。1925年から33年までの間に，67のコース（生物学，英文学，経済学，ジャーナリズム等々）が発行され，各々は著名な専門家によって作成され各コースには概論風の解説と，8～12冊の図書のリストがのせられていた。1925年から31年の間に販売されたパンフレットの数は85万部にのぼった。[29]

こうして ALA は図書館成人教育の普及に主導的な役割を果たし始め，1926年に同委員会が解散すると，その勧告を実行に移すため恒久的な部会を設けた［ALA Board on the Library and Adult Education (1926-37), Adult Education Board (1937—40)］。

さらに，このような成人教育への関心は，1930年代末には，それを公共図書館の中心的機能として拡大させていこうとする動きにまで高められていく。例えば，John Chancellor は，成人教育を特定の部門に押し込めることを批判して，〝我々は，今やすべての図書館計画や業務の中に，すなわち図書選択や目録業務，レファレンス，デスク・ワーク，広報の中に，インフォーマルな教育という目的を浸透させて，図書館全体をそれに関与させることを考える必要がある。そうすることによって，一人でなくすべての職員が大きな機会をえることができ，また自らを知り自らの世界を理解しようとする今日の人々の新しい好奇心によりよく奉仕することに，積極的に取り組むことになるであろう。〟[30] と述べて，成人教育の理念を図書館業務全体に浸透させようとした。また Mary Ruthrock は，TVA での経験から，〝図書館は，他のどんな施設よりもコミュニティのすべての成人教育機関のそれぞれ個別のプログラムを完全かつ統一された全体に統合する立場にある。〟[31] と述べて，コミュニティの成人教育活動全体の中で公共図書館がリーダーシップをとるよう主張した。そして，さらに強力な理念を提唱したのは Alvin Johnson であった。彼の主張は，教育的サービスの質と思想そのものの普及とを強調した点に特徴があった。彼は，書物をそれが他に対して与える影響を考えずに収集・提供することを "pure librarianship" と呼んで批判し，図書館の教育的役割は，図書館を図書の提供と指導に基づいた，成人教育の恒久的センター，すなわち，"a peoples' university" とすることによって可能になると主張した。彼は，読書指導や図書館が後援する討論グループを教育的効果を確実にするものとして，不特定多数に対する図書リストや展示よりも高く評価した。また，図書館がその目的を決定する際には利用者の要求に屈するべきではなく，〝健全な思想〟の普及を通じて個人の文化的，市民的発達をはかることこそが図書館の成人教育的目的であると考えた。従って，図書館員は普及される知識を評価し，コントロールする役割をもつのである。[32] 彼の報告書は公共図書館の教育理念を最も包括的に分析したものであった。そして，その主張は大きな論義を巻き起こし，すでに成人教育に積極的に取り組んでいた一部の図書館員の支持を受け，ALA Adult Education Boad の考え方にも影響を与えた。しかし，Johnson が公共図書館に独立した役割を与えたのに対しＡＬＡは他機関との協力を通して成人教育におけるリーダーシップをとるものとした。[33] そして，この穏健な見解が最も広く受け入れられたのである。ともかくもこうして，図書館成人教育は1940年までに大きな関心を呼び，なお少数ではあるがいくつかの公共図書館で，より組織的で質の高い教育的サービスが行われるようになったのである。

ところで，読書指導サービスは，その後，1925年には7公共図書館，1928年に25館，1930年30館，1935年44館（63人の担当者）と増え，他の業務とは別の特別サービスとして実施された。[34] このように普及したのは，専門職員の数が増えたこと，不況で失業者が増え，また職業教育への意欲が高まったこと，そして，成人読書に関する組織的研究が始まり，個人の関心や習慣，能力に応じた図書の選択法の基礎を提供したこと[35]などによっていた。1936年から40年にかけては，いくつかの中規模図書館でサービス範囲を拡大するため読書指導の責務が職員全体に分担されたり，大図書館では readers' bureau が照会相談の役割をもち，利用者が各主題専門部門へ回されてそこで指導を受けるという例もみられた。しかしながら，戦争の開始とともに利用者，職員ともに減少したため，次第に職員全体に業務が分担されたり，中止されたりしたため，1940年代から50年代にかけ専任をおい

ていたのは10館ほどにすぎなかった。[36] 読書指導の他にも1940年頃までに発達してきたサービスには，他の成人教育機関やグループへのサービスや図書館が後援する討論グループなどの活動もみられたが，これらは次にみるように第二次世界大戦後に読書指導に代って大いに普及することになるのである。

第二次大戦後のアメリカ社会に起った民主主義の確立へ向けての運動は，公共図書館の活動に大きな影響を与えることになった。それは自分の力で物を考える批判的かつ創造的な市民を育成しようとする運動であり，それには社会的に重要な知識や情報，さらにその理解を深めるための討論の機会を提供することが必要とされたのである。[37] 1942年から1956年の間に，公共図書館の目的を明確にしようとする試みが行われたが，それらにはそうした背景が色濃く投影されている。その最初は，1942年に任命された ALA Committee on Post-War Planning による報告書 *Post-War Standards for Libraries* であった。同報告書は公共図書館の目的として，教育，情報，美的理解，研究調査，リクリエーションの5項目をあげ，実施にあたっては，これらから個々の図書館にもっとも適したものを選んで力の拡散を防ぐべきであると勧告した。そして特に教育と情報に重点がおかれるべきであり，〝もし，'民主主義の将来が真の意味において成人教育にかかっている'ということが真実であるなら，公共図書館はその努力をもっと直接的にこの重要なサービス分野に向けるべきである。図書館が成人教育計画において主であるか従であるかはともかく，大衆の大学としてのそのサービスは絶えず強化されるべきである。成人教育の領域でもう1つ専念すべき領域は，市民の公的諸問題の検討に対して提供するサービスの焦点として果たす公共図書館の役割である。ここでまた，図書館は戦略的に幸運な位置にある。市民のための事実と(統計的)数字のセンターとしての公共図書館の潜在能力が戦後の時期において十分に開発されるべきである。〟[38]

このような教育と情報の強調は，1950年，カーネギー財団の援助で ALA と Social Sciences Research Council が行った調査報告書 *The Public Library in the United States* ではもっと徹底したものになっている。R. D. Leigh によってまとめられたこの報告書は，教育と情報を図書館の目的とし，公共図書館は大衆の大学などではなく，大衆のうち少数ではあるが重要な部分を占める人々に自己教育の手段を提供するものであるとしているのである。利用者を増やすには徹底した努力を必要とし，それによっても必ずしも大きな成果をあげるわけではないのであって，むしろ少数の選ばれたグループに質の高い情報および教育的サービスを提供した方が，大勢にサービスするより社会的貢献度は大きいと述べている。[39] この勧告の重要な点は公共図書館の目的から娯楽を排除したことである。そしてこの報告書が出て間もなくすると，娯楽的機能はむしろ商業メディアにまかせた方が適切であり，教育の概念は目的と体系的，蓄積的プロセスとをもったものに限定されるべきである，すなわち公共図書館の教育的役割は，単に内容が教育的な図書を提供することによって果たされるのではないという主張もみられた。[40] 1954年に ALA が開いた Allerton Park 会議はこのような高度に教育的な立場から，成人教育に携わる図書館員の教育の問題を検討するためのものであった。会議は，読書を普及促進するような類の活動（施設の提供，図書選択，レファレンス，資料展示，ブック・トーク）を教育的サービスの定義に含めず，次のような活動を成人教育サービスとみなした。

(1) 特定の個人あるいはグループのために，特別に計画され，特定の必要性の分析，指導による向上，そして読書一般の促進あるいは楽しい娯楽の提供といったものを超えた明確な教育的目標，これらを含んだ計画的読書プログラムを伴う読書指導プログラム。
(2) あるトピックあるいはテーマについて計画され，また教育プロセスに持続性と方向を与えるよう組織された討論会のシリーズ，フィルム・フォーラムおよびその他の継続的プログラム。
(3) 他の機関・グループによって実施される類似の計画的プログラムと積極的かつ統合的な方法で協力すること。これには，たまたまそうした学習グループに関係する人々からの要求による資料提供を含まない。[41]

これらは公共図書館に求めうる最も高度な教育的サービスであるといってよい。つまり，サービスの目的性，持続性，体系性をもって教育の概念がとらえられているのである。

しかし，このように高度の教育的理念と現実との間には大きな隔りがあった。Lowell Martin は，〝いかなる尊敬に値する図書館員でも，今日，人々に彼らが欲するもののみを提供することに同意しないであろう。他方，穏健な図書館員は誰であれ，実際上，人々に彼らが欲しないものを提供しようとはしないであろう。〟[42] と述べ，彼を長とする ALA Coordinating Committee on

Revision of Public Library Standards の報告書では公共図書館の目的として，コミュニティのすべての人々のインフォーマルな自己教育を促進する，すべての情報的要求を満たす，健全なリクリエーションと建設的な余暇の活用を奨励する，の3つをあげている。[43] そして結局これがもっとも実情にあったものであった。

成人教育サービスとして実際に行われたものも決してAllerton Park 会議の定義のように厳密に教育的なものばかりではなかった。ALA は1952年から53年にかけて，フォード財団の Fund for Adult Education の援助を受けて，国内の公共図書館の成人教育サービスを調査（有効回答数，1692館）したが，その報告書によると公共図書館によって最も多く提供されている成人教育サービスは，図書館内での展示（覧）会や図書および図書リストの展示(88.2%の図書館が実施)，他機関・グループへのブック・レヴューおよびブック・トーク(66.8)，地域のリーダーのプログラム立案を援助（65.5)，図書館外（他機関・グループ内）での展示(覧)会，選択図書提供，図書リスト提供（57.9）地域全体で催される成人教育プログラム立案に参加・援助（57.8)，他機関および自館の教育的サービスの広報(54.0)，特定の問題をテーマとした図書館のプログラム（50.5)，特定の図書・資料を複数用意・提供（50.2)，他機関・グループへ部屋，備品，視聴覚機器の提供（47.8)，地域の成人教育機会に関する情報提供（38.1)，図書館による図書に基いたプログラム（36.9)，等々となっている。[44] このように，実際に多く行われたのは読書を普及促進するようなサービスである。そして，ほとんど全職員がこれらのサービスにあたっている。[45] このような傾向は成人教育サービスが，特定のサービスや特定の部門に属するものでなくなり，図書館全体として行われるようになっていたことを示している。このことはまた，後に述べるように，成人教育サービスが一般的成人サービスと同一視される傾向があったことを示すと共に，教育の質の問題を生じさせるのである。次に，この時期に行われていた教育的サービスをもう少し具体的にみておこう。

すでにふれたように，この時期は読書指導などの個人サービスが減少し，グループ・サービスが主体となっている。これは個人サービスに費用がかかること，グループを対象とした方がより多くの人々に教育的サービスが提供できること，1940年代にグループ・ワークに関する研究が進んだことなどによっている。[46] グループ・サービスは，図書館が後援するグループ活動と，他機関・グループへのサービスとに分けられる。まず，図書館が自ら後援するグループ・プログラムには，主に大図書館で行われたものとして，講演，討論会，講習会，パネル討論などの方法で，図書，パンフレット，その他様々の視聴覚資料を使って，地域的・世界的な問題，家族生活，老人問題，音楽，文学，美術，家計，育児など多岐にわたる問題についてプログラムが企画されるものがあった。大規模に行われたものとして代表的なのは，イノック・プラット公共図書館の "Atomic Energy Institute"(1947)である。もう1つは，同一の図書・資料を使って討論するグループを図書館内に組織するもので，ワシントン D. C. 公共図書館の "Group Reading Program" (1945)，シカゴの "Great Books Program" (1945) が先がけとなった。[47] さらに ALA は，1948年に "Great Issues,"[48] 1951年に "American Heritage Project"[49] を企画したが，これらは図書を活用して批判的，創造的な市民を育成することをめざしたものであった。

このようなプログラムで講師，指導者，司会などを務めたのは，多芸な図書館員（Jack-of-all-trades librarian）や地域の有志，他機関・グループのメンバー，大学教官などであった。[50] そして，これを企画する図書館員は〝まず，資質をよく見極めてリーダーを選び，次にプログラムの立案と資料の選択・入手とに一貫して助力し，協力する。参加者に，葉書や電話を通じ，また偶々顔を合わせた時に，読んでおく図書と会合の日取りとを伝え，討論のための心地よい環境を整える。……図書館員はもっともよい意味での後援者 (sponsor)，コミュニティを新しい企画に参集させるコミュニティの仲介者として奉仕する。〟[51] しかしながら，このようなサービスは人材や費用，労力などの面での障害もあり，さきの調査では，全く行っていない図書館が 59.4% ある。[52]

次に他の機関やグループへのサービスでは，それらのための展示（覧）会，ブック・トーク，視聴覚資料・人材・成人教育機会などの情報提供，プログラム立案への参加・援助，施設設備の提供，図書・図書リストの提供などを，娯楽・リクリエーション機関，婦人クラブ，両親の組織，地域クラブ，教会，農業伸張サービス，公立・私立・通信学校などに対して行っている。[53] こうしたサービスは多数の図書館が実施していた。

ところで，このように多様なサービスが成人教育サービスとして行われ，全職員にその責務が分担されるようになったことは，成人教育を特定の部門で行われるサービスとしてでなく，図書館全体の1つの目的あるいは理念

としてとらえられるようになったことを示している。[54] そして次第に，成人教育サービスは一般的な成人サービスの中に吸収されていくのである。1957年に ALA が Office of Adult Education を廃止して，Adult Services Division を設けたのもその反映であった。この Division は，成人の継続教育，文化，リクリエーションに関する領域を担当するものとして設けられ，この中には読書指導サービスや諸機関・グループへのサービス，図書館後援のグループ・プログラムも含まれていた。ASD はまた，この領域における様々の調査研究，指導，出版，全国的機関との協力などを通じて教育的サービスの普及に努めた。[55]

次に，1955年，Fund for Adult Education の援助によって開始された ALA Library-community Project は，教育的サービスを地域のニーズに一致させるという新しい方法を提示した。これは，コミュニティを調査することによって，図書館がコミュニティの教育的必要性に基いて，長期的な成人教育計画を立案できるようにしようとしたものであった。プロジェクトは8州の8図書館を選んで，パイロットスタディを行い，その結果は詳細な手引書[56]となって結実した。こうして，これは教育的サービスに，より具体的な目的を与えるための手法を提供することになったのである。事実，このような考え方は当時のサービスに大きな影響を与えている。[57]

しかしながら，1960年代後半以降の公共図書館では，情報サービス，老人・恵まれない人々へのアウト・リーチ・サービス，地域開発への参加などに重点がおかれ，教育的サービスは，1950年代に較べ，あまり盛んではなかった。[58] けれども，1970年代に入ると，高等教育制度再編の動きやイギリスの放送大学などに刺激を受けて，大学キャンパス以外で成人に高等教育を受ける機会を提供する動きが出てきた。これらは，大学通信教育のようなものから，ニューヨーク州の Regent's External Degree のように試験に合格するだけで学位を授与するもの，College Entrance Examination Board (CEEB) の College Level Examination Program (CLEP) のように試験によって課目ごとの履習単位を授与するものまで極めて多様である。[59] これらのうち，後二者のように試験の機会を提供するだけのものでは，指導者や学習の場，資料をえる必要から公共図書館の役割が重要視されたのである。CEEB は，その計画を普及し，かつ効果をあげるため，1970年から実験として4公共図書館に協力を要請した。例えばダラス公共図書館では，地域にある Southern Methodist University (SMU) と協力し5分館を学習センターとして，CLEP 受験者の援助が行われることになった。それは，SMU が作成した *Study Guides* と *Reading Lists* (30 subjects) を図書館で配布し，図書館員は計画の説明，資料提供，助言サービスを行い，SMU はチューターを派遣して個人指導を行なったり，講習会を開いて専門的指導を行うのである。[60] CEEB はさらに図書館員の訓練・教育を行うため Library Independent Study and Guidance Projects を設けており，現在，この計画の下で15の公共図書館が地域学習センターとして機能している。これらの中には，CLEP の他にも，各館独自の教育的プログラムを開始している。[61] こうして，一部の公共図書館の間では，新しい形で教育的サービスが復活しようとしているのである。

IV. 〝教育〟と〝サービス〟

以上，アメリカにおける教育的サービスの発達を極めて大ざっぱに概観したが，本章ではそこでなお残されている問題の1つを検討してみよう。それは教育の概念に関する問題である。

教育の定義には様々のものがあるが，Lee は次のように定義している。〝教育は，個人が自分自身の努力あるいは他の個人ないしグループの援助によって，目的をもって，能力を開発し，望ましい態度を身につけ，そして新しい知識を獲得するプロセスである。このプロセスは目的をもった学習からなるのであって，行き当りばったりで偶発的な学習経験とは異る。図書館のコンテクストの中では，この教育プロセスは，知的，職業的，文化的，美的，個人的，地域的開発に関わる。〟[62] 問題はこの教育プロセスに図書館がどう関わるかである。学習者の主体性と能力を重んじた場合，図書資料の提供，分類，目録，レファレンス・サービス，図書の選択展示など，いずれも学習活動を容易にし援助するという意味では教育的でありうるし，事実，図書館成人教育と成人サービスの統合とは，そうした様々のサービスを教育という理念，目的の下において実施するということであった。そしてそれは，教育的サービスを特定の特殊なサービスそれ自身をさすものとしてではなく，公共図書館の中心的な目的の一つとしてとらえて，その下に様々のサービスを統合したという点で重要なことであった。しかしながら，1920年代以降，新しく図書館成人教育として登場したサービスは，学習を促進，援助，指導するという側面を強くもち，それだけ教育プロセスへの関わり方が強いわけ

である。教育的サービスの是否あるいはその可能性をめぐる問題，そしてその概念の混乱が，そうした教育的機能をめぐる考え方の相異から生じたのも当然であった。

教育的サービスに反対した人々は多く，図書館員は教育者か，ということを問題にした。そして，教育的サービスを擁護する側とそれに反対する側には，その解釈に大きなずれがあった。例えば J. H. Shera は，〝利用者と図書館員の間の人間関係が，学生-教師の関係になり得たのは，ごくまれな例しかない。それでもそうした正に例外から，社会における図書館員の教育的役割という全くの神話が生じてきた。図書館員の社会的責務は文化の形象的記録を収集し，組織し，提供し，そして管理すること，およびそれらの最も効果的な活用を奨励することに止まるのである以上，図書館員はその適切な意味において教育者ではありえない，〟[63]と述べて，教育への関与に反対した。しかし，擁護する側は，このように学校教育とのアナロジーではとらえず，成人教育を学校教育終了後のすべてのインフォーマルな学習経験と考えた。そして，〝図書館員は，読書と個人学習を通じて教育を継続しようとしている人々に，教育的価値をもつ資料を提供すること，読書に指導 (guidance) を求める人々に援助すること，インフォーマルな学習機会（討論グループ，映画フォーラム等）を提供すること，非学習者に，展示，ブック・リスト，ブック・トークなどを通じて教育を継続するよう動機づけを与えること，こうした手段によって自己教育の促進に資する。図書館員は helper, advisor, stimulator であって，図書館の利用を通じて継続学習をしようと思う者は，その教育の責任については自分自身が絶えず負うのである〟[64] というように，極めて幅の広いとらえ方をしていたのである。しかしながら，これでも例えば読書指導の場合，本の選択，読書コースの構成，利用者の能力や関心を把握するためのカウンセリングなどには，図書館員の価値判断や教育者としての能力が必要とされるであろう。図書館員が教育プロセスや行動プロセスにどこまで関わるべきか，あるいは関わりうるかという問題が生ずるのである。helper, advisor, stimulator という言葉には，まだあいまいさが残されている。レファレンスは要求された質問に対して答えるだけであるが，これらは価値観と積極的な働きかけがある以上，容易に教師の役割に近づきうるし，それを是とした場合でも，資料に対する知識，主題内容の理解と知識，指導能力，面接技術など高度な能力を必要とし，現実的には図書館員の資質と能力の問題になるのである。CLEP への援助では，カウンセリングや講習などの高度に教育的業務は大学教官や退職教師に任せられ，図書館員の役割は情報やガイダンス，アドバイスの提供に限られているが，それでも多くの困難が感じられ，LISGP を必要としているのである。

他方，成人サービスとして教育的意味あいを減じた場合には逆の問題が生ずる。E. Phinney は，〝公共図書館の基本的目的は継続教育の手段を提供することであり，持続的で累積的な効果をもつ活動を企画することを通じて，これらの手段の最も効果的な活用を奨励することである，〟[65]と図書館成人教育を定義し，5つの公共図書館で行われているサービスの実態を詳細に分析，報告している(1955)が，Bloom はそれらを検討した結果，それらの図書館は確かに地域の必要性に基いてサービス方針をたててはいるが，累積的，持続的な効果をもつと思われるようなプログラムを提供してはいないと述べている。その証拠として，討論会や映画会などは，しばしば，コミュニティの必要性と同じ程度に，その時々の事情，例えば美術の教師が得られたとか，労働組合に教育的関心が生じたとかいった偶発的で予知できない要素によって左右されている。グループとの関係を維持したり，ラジオや新聞を通じて広報を行ったりして，コミュニティとの結びつきは緊密であり，強い反応をえてはいる。しかし，そうした活動は図書資料が活用されることを目的としたものであって，〝教育〟という面は薄れ，むしろ〝サービス〟という面の方が強くでてくる。その結果〝図書館成人教育〟という言葉より成人サービスという言葉の方が適切になったのであったと指摘している。[66] 実際，1952-3年の ALA 調査でみても明らかなように，成人教育サービスとしてあげられているサービスの多くは読書の普及促進的な性格のものであった。そこでは，Shera が指摘したように，教育としての実質は失われ，単なる PR 活動に容易に近ずき得るのである。

確かに，Allerton Park 会議が定義したような教育的サービスと教育的読書を勧奨するようなサービスとは質的に異なるものであろう。さらに，無計画に行われた討論会や映画会，講習会などにどの程度の教育的成果が期待できるか問題となるところであろう。しかし，結局このような問題は，インフォーマルな自己教育，あるいはもっと広く考えてインフォーマルな学習経験，そのものの実態とプロセスを明らかにするような研究によってしか解決されないように思われる。本章で概観した教育的サービスは，多く経験と調査による知識と，このサービスが

有用でありうるという信念とに支えられてきた。しかし有用である，一助となりうるというサービスの姿勢は克服されねばならない。そして，教育プロセスそのものの中で図書館がどのような位置づけを与えられ，それと有機的関係をもつのかが明らかにされない限り，上記の問題は解決されないし，また効果のある教育的サービスは行われないであろう。

V. むすび

以上のように，アメリカにおける公共図書館の教育的サービスは幾多の変遷を得，またいくつかの問題を残してはいるが，今なお，少数の図書館であれ，活発な試みが行われている。その歴史の上で目立つことは，図書館の外部からの要請と援助の大きさである。カーネギー財団やフォード財団の成人教育に対する強い関心と，巨額の資金援助，そしてALAの主導的役割は，こうした教育的サービスの普及と，実験・開発に大きな役割を果たした。それに応じた図書館は必ずしも多くなく，また利用者も少数であったし，ともすればその活動は使命観に基づいた教化的な性格をもつこともあった。[67] しかしながら，少なくとも，そうした外的な力が図書館を閉じたシステムとすることから防いできたことは確かであろう。

Monroeは図書館成人教育の公共図書館サービスへの貢献を次のように述べている。〝第1に，図書館成人教育は，公共図書館の成人サービスをレファレンス・サービスの情報的機能を越えた専門的サービスとするための動機と機会を提供した。第2に，図書館成人教育は，ライブラリアンシップの理念と，民主主義やテクノロジー，余暇の増大，重大な社会変革などの影響の下に生み出された社会の教育的ニーズとの間にあった文化的遅滞(cultural lag)を克服した運動であった。〟[68]

今日，このような教育的ニーズが存在することは生涯教育論の中で説かれている所である。[69] 公共図書館が生涯教育に関与していくためには，単に貸出数の増加や登録者数の増加をはかるだけでなく，利用者の教育活動を質的に促進，援助するようなサービスの理念と技術を開発していく必要があるであろう。1920年代以降のアメリカ公共図書館における教育的サービスの発達は，そうした必要性を示唆しているのである。"Leigh は，図書が低俗な態度を変え，罪悪と戦い，あるいは文化的レベルを引き上げる魔法の力をもっているという図書館員の信念を明らかにした。図書館成人教育は，'魔法'の力に頼るよりは，図書の中にある潜在的な力を活用することを可能にする諸技術を開発しようとしてきた。"[70]

本稿は，教育的サービスの発達の概観をしたに止まり，その歴史上重要な人物，文献のすべてをとりあげたわけではないし，また，教育的サービスの他の様々の局面(図書，その他の資料との関係と役割，全体的な成人教育との関係，図書館の知識・思想に対する中立性の問題，利用者の問題，図書館規模の大小，地域差によるサービス内容の相違，不況・戦争・移民といった社会現象との関係等々)についても十分に検討を加えなかった。それらは，今後，教育的サービスの歴史的研究および理論研究を進める上で重要な要素となるであろう。

1) 日本図書館協会編．図書館ハンドブック　第4版．日本図書館協会，1976．p. 310.
2) Lee, Robert Ellis. *Continuing education for adults through the American public library 1933-1964*. Chicago, ALA, 1966. p. v.
3) Monroe, Margaret E. *Library adult education; the biography of an idea*. New York, Scarecrow Press, 1963, p. 1, 11-12.
Stone, D. Walter. "Adult education and the public library," *Library trends*, vol. 1, no. 4, 1953, p. 438-9.
4) Monroe, *op. cit.*, p. 12-13, 42, 443-50.
5) *Ibid.*, p. 15.
6) *Ibid.*, p. 444.
7) *Ibid.*, p. 449.
8) Lee, *op. cit.* p. 114.
9) Bloom, Herbert. "Adult sevvices: 'The Book That Leads You On'," *Library trends*, vol. 25, no. 1, 1976, p. 379.
10) Monroe, *op. cit.*, p. 472. もちろん，次に重要な機能として，利用の促進が加えられている．
11) *Ibid.*, p. 444-5.
12) Stone, *op. cit.*, p. 438. なお，M. Dewey の公共図書館思想については次の文献参照．小倉親雄．アメリカ図書館思想の研究．日本図書館協会，1977. p. 125-8.
13) Shera, J. H. *Foundation of the public library; the origins of the public library movement in New England, 1629-1855*. Chicago, University of Chicago Press, 1949, p. 181.
14) Whitehill, Walter Muir. *Boston Public Library; a centennial history*. Cambridge, Harvard University Press, 1956, p. 19-35.
なお，同委員会の報告書は次に全訳されている．ボストン市公共図書館委員会報告(1852年7月)，大沢正子，森妙子訳．図書館学．no. 13, 1968, p 10-13; no. 14, 1969, p. 8-11.
15) Lee, *op. cit.*, p. 116. なお以下第II章の諸事実は，特

に注記のない限り本書 (p. 1-44) によった.

16) Rothstein, Samuel. *The development of reference services through academic traditions, public library practice and special librarianship.* Chicago, Association of College and Reference Libraries, 1955, p. 21-2.

17) Lee は，レファレンス・ワークを情報および情報源を提供するもの，人的援助を利用者が書物を探したり選ぶのを援助するものとして区別している．Lee, *op. cit.*, p. 27 (cf. Rothstein, *op. cit.*, p. 29)

18) 大都市の公共図書館では，教育的読書を促進する方法として，ブック・リストの配布，本の展示，ブックトーク，コミュニティのグループや機関へのプログラム立案援助，講演の主催などを行なっていた．

19) Monroe, *op. cit.*, p. 20.

20) Lee, *op. cit.*, p. 113.

21) *Ibid.*, p. 43-4. 36か所の大駐屯地に図書館が設けられ，1919年までに600万ドルが図書およびサービスに出費され，700万冊の図書が配布された．

22) *Ibid.*, p. 43-6.

23) Detroit, Cleveland, Chicago, Milwaukee, Indianapolis. これらの図書館には，このサービスのための特別部門が設けられた．なお，ALA Enlarged Program は，コースになった読書リストによる成人自己教育の促進，社会事業的図書館活動，移民へのサービス，盲人へのサービス，図書館伸張，図書館調査，これらの活動をめざしたものであった．Lee, *op. cit.*, p. 46, Monroe, *op. cit.*, p. 25-6.

24) Learned, William S. *The American public library and the diffusion of knowledge.* New York, Harcourt, Brace & Co., 1924, p. 26.

25) *Ibid.*, p. 56.

26) Monroe, *op. cit.*, p. 29-30.

27) ALA Commission on the Library and Adult Education. *Libraries and adult education.* Chicago, ALA, 1926, p. 9-10, 103-7.

28) 上の勧告のうち成人向けの読みやすい本の提供ということについては，1925年同委員会に Subcommitte on Readable Books が設置され，次の10年間，研究を重ねて，リストを編さんするまでになった．Lee, *op. cit.*, *p.* 49-50, Monroe, *op. cit.*, p. 32.

29) Lee, *op. cit.*, *p.* 49-50.

30) Chancellor, John, ed. *Helping adults to learn; the library in action.* Chicago, ALA, 1939. p. 198.

31) Rothrock, Mary U. The library in relation to adult education 〈Wilson, Louis R., ed. *The role of the library in adult education; papers presented before the Library Institute at the University of Chicago, August 2-13, 1937*, Chicago, University of Chicago Press, 1937〉 p. 28.

32) Johnson, Alvin. *The public library; a people's university.* New York, American Association for Adult Education, 1938. ix, 85 p. これはカーネギー財団の援助でAAAE の要請で作成された報告書. Johnson は New School of Social Research の Director.

33) Monroe, *op. cit.*, p. 46.

34) Lee, *op. cit.*, p. 57-8.

35) 例えば，Gray, Williams S., and Monroe, Ruth. *The reading interests and habits of adults.* Macmillan, 1929; Waples, Douglas, and Tyler, Ralph W. *What people want to read about.* University of Chicago. 1931.

36) Lee, *op. cit.*, p. 57-61, 81.

37) Monroe, *op. cit.*, p. 50, Lee, *op. cit.*, p. 72-4.

38) ALA Committe on Post-War Planning. *Post-War standards for public libraries.* Chicago. ALA, 1943, p. 22-3.

39) Leigh, Robert D. *The public library in the United States : general report of the Public Library Inquiry.* New York, Columbia University Press, 1950, p. 48-9.

この調査は社会科学関係の研究グループによって行われた．Leigh は政治学者．

40) Houle, Cyril O. *Libraries in adult and fundamental education ; the report of the Malmö seminar.* Paris, Unesco, 1951, p. 22-3.

Asheim, Lester, ed., *A forum on the Public Library Inquiry; the conference at the University of Chicago Graduate Library School, August 8-13, 1949*, New York, Columbia University Press, 1950, p. 63, 255, 276.

41) Asheim, Lester. *Training needs of librarians doing adult education work; a report of the Allerton Park Conference, Nov. 14-16, 1954, held under the auspices of the ALA and made possible by a grant from the National Committee on Study Grants of the Fund for Adult Education.* Chicago, ALA, 1955, p. 8-10.

42) Martin, Lowell A. "Library service to adults," *Library quarterly*, vol. 25, 1955, p. 12.

43) ALA Public Library Division. Co-ordinating Committee on Revision of Public Library Standards. *Public library service; a guide to evaluation, with minimum standards.* Chicago, ALA, 1956, p. 4.

44) Smith, Helen Lyman. *Adult education activities in public libraries; a report of the ALA survey of adult education activities in public libraries and state library extension agencies of the United States.* Chicago, ALA, 1954, p. 17.

45) *Ibid.*, p. 56-8.

46) Lee, *op. cit.*, p. 82-3.

47) Monroe, *op. cit.*, p. 53-4, Lee, *op. cit.*, p. 83-86.

48) インフレーション，労使関係，アメリカとソ連な

どといった，国家が直面する重要な問題について読書と討論を促すというもので，とりあげる問題はALAが各分野の専門家との協力で提示したが，〝社会的に重要な図書〟として選ばれた図書リストは各図書館員によって作成された．

49) アメリカの遺産となるような基本的文献や思想，体験に照らして，今日の政治，社会，経済的問題を討論することをめざしたもの。1955年までに33州に1474の討論グループが生れ，28,476人の成人が参加した．Lee, *op. cit.*, p. 86.

50) Smith, *op. cit.*, p. 43.

51) Phinney, Eleanor. *Library adult education in action; five case studies.* Chicago, ALA, 1956. p. 80.

52) Smith, *op. cit.*, p. 41.

53) *Ibid.*, p. 34-9.

54) Monroe, *op. cit.*, p. 55-9, 443-50.

55) Lee, *op.*, *cit.*, p. 98-100.

56) ALA Library-Community Project. *Studying the community; basis for planning library adult education services.* Chicago, ALA, 1960. 128 p. ただし，このような考え方は古くからある．次の文献参照．Evans, Charles. "A history of community analysis in American librarianship," *Library trends*, vol. 24, no. 3, 1976, p. 441-57.

57) Monroe, Margaret E. Public libraries and museums 〈Smith, Robert M., et. al. ed. *Handbook of adult education.* New York, Macmillan, 1970〉 p. 246.

58) Bloom, *op. cit.*, p. 389.

59) これらの概略については，*Drexel Library Quarterly*, vol. 11, no. 2, 1975 に特集されている．

60) Books, Jean S., and Reich, David L. *The public library in non-traditional education.* Homewood, ETC Publication, 1974, 224 p.

61) "Independent study projects ready for pilot testing," (LJ News) *Library journal*, Feb. 1975, p. 246-8.
Brooks, Jean. "Independent study; how non-traditional is it? *Journal of academic librarianship*, vol. 2, no. 4, 1976, p. 180-4.

62) Lee, *op. cit.*, p. 121.

63) Shera, J. H. "On the value of library history," *Library quarterly*, vol. 22, 1952, p. 247.

64) Lee, *op. cit.*, p. 122.

65) Phinney, *op. cit.*, p. 3.

66) Bloom, *op. cit.*, p. 392-3.

67) このような裏面史については次の文献に詳しい。Harris, Michael M. "Portrait in paradox; commitment and ambivalence in American librarianship, 1876-1976," *Libri*, vol. 26, no. 4, 1976, p. 281-301.

68) Monroe, *Library adult education*, *op. cit.*, p. 483-4.

69) Lengrand, Paul. 生涯教育入門 改訂版 [Introduction à l'éducation permanente] 波多野完治訳，全日本社会教育連合会，1976. 110 p. 参照．

70) Monroe, *Library adult education*, *op. cit.*,p. 490.